



いずみさの昔と今 第336回

「池田谷久吉とその生涯②」 池田谷久吉と岸和田城

10月14日(土)から歴史館いずみさので開催されている秋季企画展「泉佐野の建築家―池田谷久吉とその生涯―」に関連して、2回目となる今回は「池田谷久吉と岸和田城」について紹介します。

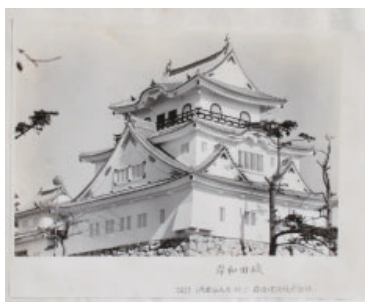
はじめに岸和田城について見ていきます。現在も岸和田市のシンボルとして悠然とそびえたつ「岸和田城」は、いつ頃建設されたのか、その詳しい時期は分かっています。岸和田市史(1597)によると、慶長2(1597)年に建設されたとされており、当初は5層の造りであったとされています。しかし、文政10(1827)年に、落雷により出火し、天守閣は焼け落ちました。それ以降、天守閣が復興されることはなく、本丸・二の丸や櫓や門のみが残っていたのですが、明治維新期になると、本丸を始めとした城郭施設が破壊され、現在では中世からのものは堀と石垣のみになってしまいました。

転機が訪れたのは、昭和28(1953)年でした。その年は、新市庁舎の建設が行われた年でもあり、それと同時期

に、天守閣復興の話が持ち上がりました。またそれと同じくして、市庁舎建設のため、岸和田高校旧校舎に仮移転していた図書館の問題もあり、2つの話が混ざり合うような形で、「天守閣内に図書館をつくる」という案が出されました。同年9月の議会で可決され、世界初の天守閣内にある図書館が建設されることになり、その設計を当時岸和田城跡保存会の理事を務めていた池田谷久吉に依頼されました。

岸和田城に関する資料は、「池田谷資料」に多く残っています。特に、昭和28年8月25日に書かれた「岸和田市立図書館新築設計図」を見ると、議会で可決する前から、天守閣復興に向けて動き始めていたことがわかります。また、この設計図は、第一案と第二案があり、初めに書かれたと思われる第一案では、現在の形とは異なる4階建て、部屋の配置も閲覧室が1階ではなく3階に作られていたり建物内の構造も大きく異なっていたことがわかります。昭和29(1954)年11月3

日の文化の日に竣工した岸和田城は、晩年の池田谷久吉の代表作の一つでもあり、岸和田市のシンボルとして現在でも人々の心を掴み、悠然とたたずんでいます。今回の企画展では、岸和田城の設計図青焼きや、建設当時の写真、再建記念瓦など岸和田城に関する資料も展示しています。ぜひお立ち寄りください。今回は、「池田谷久吉と蟻通神社」について紹介します。



▲池田谷久吉設計 岸和田城

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの ☎469-7140 Fax469-7141 休館日 月曜日、毎月最終木曜日(いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館) 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで) 入館料 無料

日本遺産・葛城修験文化を巡る④ ～火走神社～

「日本遺産」に追加認定された「葛城修験 ― 里人とともに守り伝える修験道はじまりの地」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介いたします。

問合せ 文化財保護課



火走神社

七宝瀧寺の寺僧(山伏)は、入山田村(土丸・大木)の信仰、農業生産、政治交渉など中世の村に深く関わってきました。また、聖なる山の山伏は聖なる存在で、祈禱やまじないは村の生産、信仰のよりどころであったと思われます。南北朝時代には、七宝瀧寺中興の志一上人が滞在し、祭事を行うなどつながりは深かったようです。戦国時代の九条政基は、雨が降らなかった場合はまず七宝瀧寺の僧が里に下りてきて火走神社で雨乞いをし、それでだめなら七宝瀧寺に戻って祈禱し、最終的に行者の滝に鹿の頭を投げ込んで、神を怒らせて恵みの雨を降らせたという日記に記述しています。

火走神社は、石灯籠にも彫られているようかつて瀧大明神と呼ばれ、主祭神は鬼滅の刃を連想させるカグツチ神です。火走の社名については、祭事に男巫が火の上を走ることからと言われています。神社の背後の谷筋には南北朝時代の後村上天皇の宮「南朝の吉祥御所」があったとされ、北朝軍が攻め込んだおり、神社の扉が開き、火の矢をもった神兵がどっと繰り出して撃退したことから、後村上天皇が社名を与えたことに由来する記念碑が幣殿の左横に建立されています。

こういったことから火走神社では、火と密接な水、里人の生活に大きく関わる雨乞い祭りの舞台として中世集落の信仰の中心となっていた歴史が、今も大木地区の人々に語り継がれています。